

# 平成 23 年度公開講座フランス語関連講座概要

—安価で良質な外国語教育を目指して—

清 水 まさ志  
(富山大学非常勤講師)

## はじめに

平成 23 年度は、前期・後期とも 5 講座を開設した。「中級フランス語」1・2、「初級フランス語」3・4、「入門フランス語フランス文化」1・2（五福キャンパスと高岡キャンパス）、「愛を語るフランス文学」1・2。また後期講座「外国のことばと文化を楽しく学ぶ～これからはじめたい方へ～」においてフランス語の回を担当した。まず、今年度新たに高岡キャンパスにおいてフランス語講座を開講したところ、前期は 7 名と少なかったものの、後期は 19 名の受講者が集まり、呉西地区においてもフランス語学習の需要が確かめられ、大きな成果を上げることができた。また、「愛を語るフランス文学」と題して、フランス文学の原文講読の講座を開講、前期にスタンダールの『恋愛論』、後期にボードレールの『悪の華』を取り上げた。前期に 10 名、後期に 7 名の受講者が集まり、少ないながら熱心な受講者に恵まれ、平成 24 年度も継続していくことが決まっている。多種多様な講座が開設され、全国的に見ても非常に充実した富山大学公開講座であるが、その中でフランス語関連講座が、五福および高岡キャンパスにまたがり前期・後期合わせ 10 講座も開設できたことは、フランス語教育に携わる者として喜ばしい限りである。

5 講座とはいえ、一講座あたりの受講者は 15 名以下であり、受講料を鑑みれば採算性が高いとはいえない。今年度、何人かの受講者の方が「公開講座は受講料が安くていい」とおっしゃっていた。それはすなわち一般の語学学校で学ぶとなると、出費がかさむということだろう。そして講座担当者としても、公開講座は安価で良質な語学教育を提供できる場として、まだまだ可能性が大きいと考えている。特に学ぶ場が多くない第二外国語の場合、安価である点は非常に重要だと考えられる。フランス語の場合、学生のクラスでも、このような少人数で学習できる環境を見出すのは年々難しくなっている。実際、私立大学では、選択科目のフランス語で 5 人以上の履修学生がいない場合、授業自体が開講されないケースもある。しかし語学の授業は、受講者が多いほど一方的な講義にならざるを得ず、文法と会話の学習をバランス良く進めるためには、やはり少人数が好ましい。安価な受講料と少人数で語学講座が開設できている公開講座は、今のところ外国語学習としては大変理想的な状況である。

## 1. 英語教育と第二外国語教育

日頃フランス語教育ばかりに携わっていると、現在の英語偏重の外国語教育を嘆くことはあれ、英語教育の実際に関してあまり注意を払ってこなかった。それゆえ、平成 23 年 9 月 23 日に開催された第 14 回五福キャンパス教養教育教員研修会において、英語教育の実践を聞くことができ大変参考になった。五福キャンパスの教養教育の授業では、毎年科目を決めて学生による授業評価アン

ケートを実施しているが、そのアンケートで高評価を得た科目の担当教員が、「グッドプラクティス」と題して教員研修会で発表を行っている。平成23年度は、英語に関する発表があり、科目の違いこそあれ同じ外国語教育を担当する者として大変興味深かった。その際に、発表者に対して会場から出た質問が印象深かった。「今の英語教育は、英語を『英語』として教えているのですか、それとも『共通語』として教えているのですか」、この質問に対して発表された方は少々困惑されていたように見受けられたと同時に、現在の英語教育の課題も垣間見られた気がした。各大学で英語教育に関して様々なプログラムが取り組まれていて、富山大学の教養教育でも独自のプログラムの構築を目指しているが、現在まだ富山大学の教養教育全体で、どちらの方向性なのか統一された意思があるわけではないようだ。英語は英語圏の言語であるだけでなく、違う言語を話す人々同士の「共通語」であるという認識がますます広まりつつあり、おそらく英語教育は「共通語」として教える方向に進まざるを得ないだろうと予測される。

その場合、英語を学ぶ際の基準が変化せざるを得ないだろう。英語を「共通語」として学ぶ場合、極端な言い方をすれば、英語は「目的」ではなく「道具」にすぎなくなる。そして英語を作り上げてきた英語圏の文化を学ぶ必然性は低くなる。英語を学ぶためにシェイクスピアについて知る必要はない。むしろ英語で夏目漱石について十分に説明できることがより重要となるだろう。イスラム圏の人々は英語に堪能でも、それと同時に英語圏の文化を受け入れているわけではない。アメリカの経済力を背景に英語圏の文化も世界に広がり、「英語」がいわば特権的な地位に上りつめたとき、「英語」は「共通語」となり「目的」ではなく「手段」と見なされていくだろう。この点は、英語を「英語」として学んできた日本人の教員にとっては戸惑わざるを得ない状況だと考えられる。英語を「共通語」として教える方向に進めば進むほど、「英語」を育んできた文化への関心は失われていくと考えられるからだ。そして英語教育は、ネイティブを基準とした「英語」教育ではなく、日本人を基準とした「共通語」教育とならざるを得ないだろう。しかし英語圏ではない国々にとって、それはむしろ好ましい事態であろう。その結果、「共通語」をきっかけとして、自国の言葉と文化、そして相手の国の言葉と文化を考え、それぞれの言葉と文化を尊重する態度こそが重要であることが明らかになるからだ。そうでなければ、日本語を「国語」としながら英語を「共通語」として学ぶことは不可能ではないだろうか。

この問題は、実はフランス語教育の場でも同じである。フランス語も、ヨーロッパの「共通語」と考えられた過去と、世界各地へ植民地政策を行った歴史から、フランス共和国を基準とした「フランス語」として教えるのか、カナダのケベック地方やアフリカの国々も含んだフランス語圏の「共通語」として教えるのか、これはなおざりにできない問題である。現在の「外国語としてのフランス語」教育は、「共通語」として教える方向に向かっている。ただフランス語を英語と並ぶ「共通語」としてフランス語教育を推し進めることは、学生に対するひとつの戦略としては有効でも、一般人を対象とした公開講座においてそれを強調するのはあまり有効でないと考えている。

## 2. 実用語、専門語、社交語

平成23年度後期に開講された講座「いろいろな言葉を学んでみよう」は、毎回違った外国語（英語、フランス語、ドイツ語、中国語、韓国語）を学ぶ講座で、フランス語の回を担当した。趣旨は面白かっただけに、受講者が男性2名と少数だったのは残念だった。おそらく前期公開講座の開始前にこうした講座が開講されれば、その後の指針になりやすく、受講者も増えていたのではないかなと思われる。ただ担当者としては、五つの外国語のなかでフランス語をどのように位置づけるかを



考え、一般の方にプレゼンテーションする良い機会であった。その際に、実用語、専門語、社交語という区分を使い、フランス語を社交語としてプレゼンテーションした。現在の実用語である英語とこれからの実用語である中国語、そして特定の分野の専門語であるドイツ語に対して、フランス語はそうした実利的な観点とは別に、人と人が一緒にいて楽しい時間を持つための言語、すなわち社交語であるとして説明を試みた。

人間の人生は仕事だけではない、どれだけ日々の生活を楽しく豊かに生きるか、そこにこそ生きる大きな意味があり価値があると考えられる。フランス語とフランス文化は、生活を楽しむ豊かにする術、「アール・ド・ヴィヴルart de vivre = 生活の術」を発展させてきたところに大きな特色がある。その観点を取り入れ、フランス語を学びフランス文化を知ること、受講者の日々の生活が少しでも楽しく豊かになることを、公開講座フランス語の趣旨と考えてきた。こうした方向性は、当然フランス語だけに限られるわけではないが、その方向性をより前面に出せる点に特色が見出せると考えている。実利性ばかりが求められ非常にストレス度の高い社会に生きるとき、こうした観点は非常に重要だと考えられる。

現代のインターネット社会は、ブログ、ツイッター、フェイスブックなど、世界規模で多くの人と知り合う場があり、そうした場で友だちの輪を広げるためにも外国語を知ることには大きな意味を持っている。ただ、こうしたコミュニケーションツールは、遠くの人とコミュニケーションを取るためには非常に有効でも、すぐ側にいる人とのコミュニケーションをなおざりにしてしまう側面があるのも考えなければならないだろう。授業中に学生が携帯電話をいじっている風景が日常化してしまっているし、人と話していても携帯電話が気になりチェックしてしまう人も多い。インターネット・ツールもやはり良い面、悪い面がある。

今年度、芸術文化学部の一年生対象のフランス語クラスで、公開講座の内容を試してみた。「フランスの朝食」と題し、フランスパンにジャムを塗り、カフェ・オ・レを飲みながらみんなで食べるという単純なものである。ある学生がアンケートに「あまりにおいしかったので、一人で試してみたがおいしくなかった、やはりみんなで食べたからおいしかったのだろう」と書いていた。インターネットでどんなに世界中の人と活発にやりとりしても、ふと電源を切ってまわりを見回せば一人きりだというのでは、人生は豊かだとはいえないのではないだろうか。学ぶことも同じだと考えられる。多種多様な教材や便利なツールが存在する現在、語学は一人でいくらかでも勉強できる。しかしそれでも楽しく学ぶことを考えるならば、仲間と一緒に学ぶ場があることが大切なのではないかと考えられる。今のところ、公開講座フランス語では、フランス語を仲間と一緒に楽しく学ぶ「共通語」としてとらえているといっているだろう。しかし、こうした場を手軽に確保することは、現代社会に生きる社会人にとってとても難しいのではないかと思われる。

### 3. 現在の講座における課題

「日々の生活を豊かにする」、「仲間と共に楽しく学ぶ」を掲げて、これまで5年間公開講座フランス語を担当し、前期・後期合わせて10講座まで増やしてきたが、特に平成23年度は現在の体制の悪い側面が顕著に見られた。第一に、富山大学公開講座の語学講座に設定されているレベル別区分が、フランス語講座にはうまく適用できないことが明瞭になってきた。というのも、フランス語講座では、レベル別ではなくクラス別と考えているからである。レベル別は、語学講座の基本であると考えられているが、時間的制約の多い社会人の場合、必ずしもレベルと受講可能な日時は一致できないのが実情である。フランス語は、継続的に同じ仲間と同じ時間帯で、スライド的にレベル

を上げていくという方向性を取ってきたので、年度毎にレベルの名称が変更されても、基本的にレベル別ではなくクラス別である。しかしその結果、平成 23 年度「中級フランス語」(土曜日 10:00 ~ 12:00)と「初級フランス語」(土曜日 13:00 ~ 15:00)のクラスは、違う教科書を使用しているため、初級クラスの進度が中級クラスに追いついてしまい、平成 24 年度はいずれも「中級クラス」という講座名にせざるを得なくなった。これは継続的な学習から見れば変ではないが、新たに講座を受講しようとする人には不都合であろう。

さらにクラス別で継続的な受講者が多い場合、すでにクラス内に人間関係と雰囲気を作られていて、途中からの受講者が溶け込みづらいという欠点もますます顕著に見られた。23 年度に新たに開設した五福キャンパスと高岡キャンパスの「入門フランス語フランス文化」講座では、後期から受講する受講者の定着率に著しい差が見られた。五福キャンパスでは、前期 9 名の受講者の内 8 名が後期まで定着されたが、後期に新たに受講された 5 名は、その内 1 名しか定着されなかった。すなわち、いかに途中から入ることが難しいかを考えさせられた。一方、高岡キャンパスでは、前期受講者 7 名の内 5 名が後期まで定着されたし、後期に新たに受講された方 14 名も、その内 12 名が最後まで定着された。すなわち、新しい受講者が多い場合、明らかに定着率が高いことが明らかになった。いくらクラス別だとはいえ、講座が閉鎖的になることは避けねばならず、継続的な学習と途中からの受講者の受け入れに関して、どう対処していくかより多く考えていかなければならない。

継続的な学習に効果を上げる場合、夏期と冬期のブランクにどう対処するかという点も大きな課題として残されている。ほとんどの受講者が口を揃えて「休みの間に習ったことを忘れてしまう」とおっしゃるからだ。5 年間、5 月から 7 月末までの前期と、10 月から 12 月の半ばまでの後期に、回数は 11 回から 12 回でずっと開講してきたが、継続的な学習を考える場合、ブランクの期間の学習に関して何らかのフォローを考えなければならないだろう。

高岡キャンパスでは後期の最終回後、受講者の方が「公開講座フランス語」のブログを開設してみてもどうだろうか」と提案くださり、非公式のブログを開設してくださった。講座終了後なので、今のところ活発な交流は見られないが、平成 24 年度はこうしたツールも積極的に活用していくことを考えている。富山大学には学生と教員のみがアクセスできる PSNS (Psycho-Social Networking Service) システムがあるが、公開講座の一般受講者が利用できるものではない。公開講座も、いずれはホームページ上で各講座のブログを設置できるようにして活動内容を公開していく必要があるかと思うが、取りあえず独自にこうしたインターネット・ツールの利点を活用して、受講者との連絡や交流、学習のフォローなど行っていくことを実践してみたいと考えている。

## 結びに代えて

フランス語教育に携わる者として、公開講座は外国語教育の理想的な場であると同時に試行錯誤の実験の場である。優先順位で英語教育ばかりが語られる学生の外国語学習であるが、英語が共通語となった先に、それぞれの国の文化と言葉を尊重する方向性において、第二・第三外国語の重要性が見えてくるのではないだろうか。日本語が国語であり続けるためにも、日本語を話す人々が様々な言葉や文化を学ぶ機会を失わないためにも、そしてその機会が特別な人のためではなく誰にでも手が届くものであるためにも、安価で良質な外国語教育を一般の受講者に提供し続けていきたいと考えている。